

1 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（一）

第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほ

ぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

第一部 重商主義の原理に照らしても不合理な制限

重商主義が金銀を増やす第二の手立ては、「逆差」と見なす相手国からの輸入に特別の制限をかけることである。英国では、シレジア産ローンは所定の関税を納めれば内需向けに輸入できる一方、フランス産のカンブリックやローンはロンドン港への搬入に限り、保税倉庫に収めて再輸出する場合にのみ認められた。ワインについても、フランス産にはポルトガル産などより高い税率が課された。さらに一六九二年のインポストでは、仏産品に一律二十五%の従価税を課し、他国品の多くは五%を超えない軽課にとどめた（仏産ワイン・ブランデー・塩・酢は、別の法律または同法の特則で重課）。一六九六年には、なお抑止が不十分として、ブランデーを除く仏産品に追加で二十五%、仏ワイン一トンにつき二十五ポンド、仏酢一トンにつき十五ポンドの新税を上乗せした。加えて、関税表掲記品に広く課される一般の五%関税からも仏産品は常に外されず、三分の一・

三分の二の追加関税を合わせて一回分の一般関税とみなすなら、それが通算五回かかった勘定になる。結果として、当時の戦争勃発前には、仏産の多くの品が最低でも七十五%の税負担を負い、多くは事実上の禁輸となった。フランスも報復的に英産品へ同様の嚴課を科し、公正な往来はほとんど絶え、現在では、英国から仏国へ、あるいは仏国から英国へ、双方とも密輸が主要な輸入経路になっている。前章で検討した原理が私益と独占の精神から生じたのに対し、ここで取り上げる原理は国民的偏見と敵意に根を持つ。そのぶん、予想どおり、さらに不合理であり、重商主義の理屈に照らしてさえ正当化し難い。

第一に、たとえば英仏間の自由貿易で収支がフランス有利になるのが確実だとしても、それだけで英国に不利だとか、英国の通商全体の収支が一段と悪化すると結論づけることはできない。フランスの葡萄酒がポルトガル産より良質で安く、フランスの亜麻布がドイツ産より優れて安いなら、英国が必要とするワインと亜麻布をポルトガルやドイツではなくフランスから買うほうが有利である。対仏輸入額は大きく増えても、同等の品質の品をより安く買えるぶん、年間の輸入総額はその差の限りでむしろ小さくなる。輸入した仏産品を英国国内で全量消費すると仮定しても、この結論は変わらない。

3 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

さらに、仏産品の相当部分は第三国へ再輸出でき、そこで利ざやを得て売れば、輸入した仏産品全体の原価に匹敵する額を引き戻し得る。東インド貿易についてしばしば言われることは、仏産品についても当てはまるかもしれない。すなわち、東インドの品々の大半は金銀で仕入れるにせよ、その一部を他国へ再輸出することで、全仕入額を上回る金銀が当該貿易国に戻ってくることもある、という点である。実際、現在のオランダの重要な取引の一つは、仏産品を他の欧州諸国へ運ぶ回送であり、英国で飲まれる仏産ワインの一部でさえ、ホラントやゼーラント経由で密かに入っている。もし英仏間に自由貿易が認められるか、あるいは仏産品を他の欧州諸国の品と同じ関税で輸入し、再輸出時には還付を受けられるなら、イングランドも、オランダにとってこれほど有利と見える取引に一部あずかることができたはずである。

第三に、そして最後に、二国間のいわゆるバランスがどちらに傾いているのか、どちらがより高い価値を輸出しているのかを決める確かな基準はない。実際の判断は、多くの場合、特定商人の私益に唆された国民的偏見や敵意に左右されがちである。指標としてしばしば引き合いに出されるのは税関統計と為替相場の動きだが、税関帳簿における評価額の不正確さのため、税関統計が非常に心もとない基準であることは、いまや一般

に認められていると思う。為替相場の動きも、おそらくそれとほぼ同程度に当てにならない。

ロンドンとパリの為替が平価にあれば、ロンドンからパリへ、パリからロンドンへ、それぞれ負っている債権債務が概ね相殺されているしとされる。逆にロンドンでパリ向け手形が割高で取引されるなら、相殺し切れず現金を送る必要がある、その送金に伴う危険・手間・費用の分だけ割増が要求・支払われているということだ。ふだんの債権債務の状態は、両地の通常の取引関係に規定され、どちらかが相手からの輸入を輸出より多くすれば、その側が純債務超過になる。したがって、為替の平常水準は両地間の債権債務の平常状態の手がかりであり、ひいてはそれを規定する両地の輸出入の平常状態の手がかりでもある、とされる。

しかし、為替の平常水準が二地点間の債権債務の平常状態を示すものだとしても、そこから直ちに「その側の債権超過＝貿易収支でも有利」とは結論できない。二者間の債権債務は、彼此の直接の取り引きだけでなく、どちらか一方の第三の土地との取り引きにも左右されるからである。たとえば、イングランドの商人がハンブルク、ダンツィヒ、リガなどへの支払いを、オランダ払いの手形で決済するのが常であれば、英蘭間の債権

5 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（一）

債務の平常状態は英蘭の直接取引のみでは決まらず、イングランドの対第三地取引に影響される。この場合、たとえイングランドの対蘭輸出が対蘭輸入を大きく上回り、「貿易差は英有利」であっても、イングランドは毎年オランダへ送金を余儀なくされうるのである。

さらに、従来の平価の算定法では、為替の常態が有利に見える国の債権債務の実情が、実際にその国に有利かどうかを十分には示せない。計算上の為替（名目為替）と実勢の為替はしばしば大きく食い違い、後者について確かな結論を、前者の動きから導き出せない場合が多いのである。

英仏間の為替について言えば、イングランドで英造幣局の基準どおり純銀一定オンスを含む金額を支払い、フランスで仏造幣局の基準どおり同量の純銀を含む金額の手形を受け取れるとき、為替は平価にあるとされる。これより多く支払うなら割増（プレミアム）を払ったことになり、為替は英不利・仏有利とされ、逆に少ない支払いで済むなら割増を得たことになり、為替は仏不利・英有利とされる。

第一に、各国の流通貨幣の価値は、各造幣局の基準だけでは測れない。実際に流通する貨幣は、国ごとに磨耗や削り取りなどで基準からの劣化の度合いが異なり、他国通貨

との比較で効いてくるのは「本来含むべき純銀量」ではなく「実際に含まれている純銀量」である。ウィリアム王時代の銀貨改鑄前、英蘭間の為替は、両国造幣基準で通常どおりに算定すると英不利二十五%であったが、当時の英国流通貨の価値は基準値を二十五%強下回っていた（ロウンズ氏）。したがって、計算上の為替が大きく英不利に見えていた当時でさえ、実勢の為替は英有利であった可能性がある。つまり、イングランドで実際に支払った純銀オンス数がより少なくても、オランダでより多くの純銀オンス建ての手形を得られ、表向きは割増を払ったと見なされた者が、実際には割増を得ていたかもしれないということである。英金貨改鑄前の仏貨は英貨より磨耗が少なく、基準に二〜三%近かった。ゆえに、算定上の対仏為替が英不利二〜三%にとどまる場合、実勢の為替は英有利であり得た。金貨改鑄以後、為替は一貫して英有利・仏不利で推移している。

第二に、鑄造費の負担方法は国により異なる。イングランドでは公費負担で、標準銀一ポンド重を造幣局に持ち込めば、同じ標準銀一ポンド重を含む六十二シリングが戻る。フランスでは鑄造税八%が差し引かれ、費用を賄うだけでなく小さな歳入ともなる。このため、鑄造が無償の英貨は、流通価値が内在する地金価値を大きく上回ることはない

7 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（一）

が、仏貨は「加工賃」が上乘せされ、その分だけ価値が高くなる。同量の純銀を含む額面であっても、仏貨のほうが英貨より価値が高く、それを得るにはより多くの地金や他の商品が要る。したがって、両国の流通貨幣がそれぞれの造幣標準に同程度近いとしても、英貨で同量の純銀を含む仏貨（ひいてはその金額の対仏手形）を等価で買い求めることはできない。もし対仏手形の割増が仏側の製造費相当で済むのであれば、実勢の為替は両国間で平価にあり、債権債務は相殺され得る一方、計算上の為替は仏有利に見える。割増がそれを下回るなら、計算上は仏有利でも、実勢は英有利になり得る。

第三に、アムステルダム・ハンブルク・ヴェネツィアでは為替手形の決済に「銀行貨（バンク・マネー）」を用い、ロンドン・リスボン・アントワープ・リヴォルノでは各国の流通通貨で支払う。銀行貨は、同額面の流通通貨よりつねに高く、たとえばアムステルダムでは銀行貨千ギルダーは市中通貨の千ギルダーよりも価値が高い。両者の差は「アージオ」と呼ばれ、同地では概ね五%前後である。両国の流通通貨がそれぞれの造幣標準に同程度に近いとしても、一方が流通通貨で、他方が銀行貨で手形を決済するなら、名目為替は銀行貨で払う側に有利と表示され得る。実質為替が流通通貨側に有利であっても、より良質な通貨（標準に近い通貨）で支払う側に名目が傾くのと同じ理屈で

ある。實際、金貨改鑄前には、ロンドンの名目為替はアムステルダム、ハンブルク、ヴェネツィアなど銀行貨決済の諸都市に対して概して不利だったが、だからといって実質為替まで不利だったとは限らない。改鑄後は、これらの都市に対してもロンドン有利となった。他方、リスボン、アントワープ、リヴォルノなど流通通貨で決済する都市に対しては（フランスを除けば）名目為替はおおむねロンドン有利であり、実質為替もおそらく同様であつた。

補論 預金銀行について——とりわけアムステルダム銀行

フランスやイングランドのような大国では、通貨はほぼ自国鑄造の貨幣だけで成り立っている。このため、流通貨が磨耗や切り下げで基準価値を下回っても、改鑄によって通貨制度を実効的に立て直せる。これに対し、ジェノヴァやハンブルクのような小国では通貨を自国貨だけでは賄えず、住民が恒常的に往来する周辺諸国の貨幣が大きな比重を占める。したがって、こうした国々では自国貨を改革しても通貨全体を再建できるに限らない。しかも外国為替手形の決済がこの混在通貨で行われる場合、そもそも価値が不確かな通貨の不確実性のために、為替はつねに小国に不利に振れがちで、その通貨

9 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（一）

は国外では本来の価値より低く見積もられやすい。

この不利な為替による不便を和らげるため、小国は通商の利益に目を向けるようになると、一定額以上の外国為替手形は市中通貨ではなく、国家の信用と保護の下に置かれた銀行の帳簿振替や支払指図で決済する制度をしばしば設けた。この銀行には、国家の標準どおりの良質な真正貨で正確に支払う義務が課される。ヴェネツィア、ジェノヴァ、アムステルダム、ハンブルク、ニュルンベルクの各銀行は、当初はいずれもこの目的で設立されたと見られる（のちに別目的に供されたものもある）。この銀行貨は市中通貨より質が高いため、必ずアージオ（上乘せ）が付く。その幅は市中通貨の基準からの劣化度合いに応じて変わる。たとえばハンブルク銀行のアージオは通例十四%前後と言われ、これは国内の良質な標準貨と、周辺諸国から流入した切り下げ・磨耗などで目減りした通貨との想定差を反映している。

一六〇九年より前、アムステルダムには欧州各地から削り取りや磨耗の激しい外貨が大量に流入し、市中通貨の価値は、造幣直後の良貨に比べて約九%も低下していた。良貨は市場に出るや否や溶かされるか持ち去られ、こういう時にはいつもそうなる。商人は通貨の潤沢さに反して、為替手形の決済に充てる良貨を十分に確保できず、抑止のた

めの規制を重ねても、手形の価値は大いに不安定化した。

この不便を改めるため、一六〇九年、市の保証の下に銀行が設立された。銀行は、外国貨や軽量・摩耗した国内貨を、国内標準貨に照らした実質価値で受け入れ、鑄造費や管理費に必要な最小限を差し引いた残額について、帳簿に信用（バンク・マネー）として記帳した。バンク・マネーは造幣標準どおりの価値を正確に体现するため、常に市中通貨より内在価値が高い。あわせて、アムステルダムで振り出しまたは取り引きされる手形のうち六百ギルダー以上は、すべてバンク・マネーで決済することが定められ、この措置により手形価値の不確実性はたちどころに解消された。以後、商人は外国為替の決済に備えて銀行に口座を持つことが不可欠となり、バンク・マネーへの恒常的な需要が生まれた。

バンク・マネーは、市中通貨に対する内在的な優位と、決済需要がもたらす上乗せ価値に加えて、いくつかの利点を備える。アムステルダム市の保証の下に火災や盗難などの災厄から守られ、単なる帳簿振替で支払えるため、数え直しや場所間の運搬に伴う手間・危険がない。これらの利点ゆえ、当初からアージオが付いたとみられ、銀行に最初に預けられた資金は、そのまま銀行内にとどまり、市場でプレミアム付きで売れる債権

11 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

として扱われるのが通例になった。現金で引き出せば、このプレミアムを失うからである。造幣直後の新しいシリングが、擦り減ったシリングより購買力が大きいわけではないのと同様、銀行の金庫から私人の手元に移った良貨も、市中通貨に混ざれば識別がつかず、その価値は一般通貨と変わらない。銀行の金庫内にあるあいだけ、その優位は確実に担保される。さらに、引き出してしまうと、保全性・安全で容易な振替・外国為替の決済といったバンク・マネーの利点を失い、加えて（のちに示すとおり）保管料の支払いも要する。

創設当初、硬貨での払い戻し義務を伴う預託は銀行の原資、すなわちバンク・マネーで表示される価値の全体を裏づけていたが、現在その比率はごく小さい。地金取引を円滑にするため、銀行は長年にわたり、金銀地金の預け入れに対して帳簿上の信用を与えてきたが、その評価は造幣価格よりおおむね五%低い。同時に、預託者（またはその持参人）が六カ月以内であれば、預入時に帳簿へ記載されたバンク・マネーと同額を銀行へ再振替し、保管料として銀なら〇・二五%、金なら〇・五%を支払うことにより、地金を引き出せる旨を記した預託証（レシート）を発行する。他方、期限までに所定の手続きを履行しないときは、当該預託は受入時の価格（すなわち帳簿に記載した額）で銀

行の所有となる。保管料は倉庫料に当たり、金の料率が銀より高い理由としては、金の品位の鑑定が銀より難しいこと、より高価な金属であるがゆえに不正の被害が大きくなりやすいこと、さらに銀が基準金属であるため、国家として銀の預託をより奨励したいという意図があること、などが挙げられている。

地金の預託は、相場がやや安いときに行われ、値が上がってきた局面で引き出されるのが通例である。オランダでは（英の金貨改鑄前と同じ理由で）市価が概して造幣価格を上回り、銀（品位十二分の十一、八オンスⅡ一マルク）一マルク当たり六〇十六スタイファアの差が生じるのが普通とされる。銀行の付与額（バンク・プライス）は一マルク二十二ギルダー、造幣価格は約二十三ギルダー、市場価格は二十三ギルダー六〇二十三ギルダー十六スタイファア（造幣価格比二〇三%高）で推移する。金地金でも、おおむね同様の関係が成り立つ。預託証（レシート）は、ふつう市価と造幣価格の鞘を反映して売却できるため、ほとんど常に一定の価値を持ち、六か月の期限切れまで放置したり、更新料（銀〇・二五%・金〇・五%）の支払いを怠って受入価格で銀行帰属にさせる事例は稀である。とはいえ皆無ではなく、より高い保管料がかかる金では、銀に比べてやや起こりやすいと言われる。

13 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

地金を預けてバンク・クレジットとレシートを受け取った者は、期日到来の為替手形を前者で決済し、後者は地金相場の見通しに応じて売るか保有するかを選ぶ。両者が同一人の手元に長く併存することは稀で、そもそもその必要もない。地金を引き出したいレシート保有者は、通常の相場で買えるバンク・マネーを容易に見つけられ、逆に地金を受け取りたいバンク・マネー保有者も、必要なレシートを不足なく調達できるからである。

バンク・クレジット（バンク・マネー）の保有者とレシートの保有者とは、銀行に対する二種の債権者である。レシート保有者は、受入価格と同額のバンク・マネーを銀行に再振替しないかぎり、当該地金を引き出せない。自分のバンク・マネーがなければ、保有者から買い入れるほかない。他方、バンク・マネーの保有者は、必要量に見合うレシートを銀行に呈示しなければ地金を引き出せず、手持ちがなければ保有者から購入する。レシート保有者が支払う五%のアージオは、造幣価格がバンク価格を五%上回る地金を引き出す権能に対する、実在の価値の対価である。同様に、バンク・マネー保有者が買うレシートの代価は、市場価格が造幣価格をおおむね二〜三%上回る地金を引き出す権能に対する支払いである。要するに、レシートの価格とバンク・マネーの価格の合

算が、地金の完全な価値（価格）を成す。

国内流通貨の預託に対しても、銀行はバンク・クレジットとレシートを発行するが、このレシートは市場で無価値となることが少なくない。たとえば、流通上は一枚三ギルダー三スタイファーで通用するデュカトンを預けても、銀行の信用付与は一枚三ギルダー（流通価値比五%引き）にとどまる。併せて、六か月以内なら保管料〇・二五%を払って元の枚数を払い出せるレシートも出るが、市場で値が付かないのが通例である。というのも、三ギルダーのバンク・マネー自体が市場で三ギルダー三スタイファー（払い出したデュカトンの満額価値）で売れ、しかも払い出しには〇・二五%の費用がかかり、レシート保有者に純損となるからである。もともと、銀行のアージオが三%程度に下がると、このレシートにも一・七五%ほどの値が付く余地がある。だが実勢アージオは概ね五%のため、レシートは期限切れで銀行帰属（いわゆる「銀行落ち」）になりがちだ。金のドウカート預かりのレシートは保管料〇・五%が重く、失効はさらに起こりやすい。こうしてコインや地金の預託が銀行帰属となったときに銀行が得る五%は、その預託を恒久に保管する倉敷料と見なせる。

失効したレシートに対応するバンク・マネーの総額は、全体としてはかなりの規模に

15 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

達しているはずだ。創設当初の預入分が、その後も更新にも払い出しにも損失が伴う事情から、当初のまま据え置かれてきたと一般に考えられているからである。とはいえ、その金額がいかにほどであつても、バンク・マネー全体に占める比率はごく小さいとみなされる。というのも、アムステルダム銀行は長く欧州の地金の大倉庫として機能し、地金に関するレシートの失効（いわゆる「銀行落ち」）はきわめて稀だからである。実際のバンク・マネー、すなわち銀行帳簿上の信用の大半は、近年に至るまで、地金商が絶えず行う預け入れと引き出しにもとづいて新たに生み出されてきたと推定される。

銀行に対する払い出し請求は、引換証（レシート）を通じてしか行えない。失効レシートに対応する少量のバンク・マネーは、有効レシートに裏づけられたはるかに大きな残高と混在しており、たとえレシートの付かないバンク・マネーが相応の額存在するとしても、「この部分は請求不能」という特定の区分があるわけではない。銀行が同一の対象について二重に負債を負うことはないから、レシートを持たないバンク・マネー保有者は、それを購入しないかぎり銀行に払い出しを請求できない。もつとも、平時であればレシートは市場価格で容易に入手でき、その価格は、レシートによって銀行から引き出せる貨幣や地金を売却した場合の価格と、おおむね釣り合う。

非常時には様相が一変する。一六七二年の仏軍侵攻のような国難では、バンク・マネーの保有者が一斉に引き出しに走り、レシートの需要が暴騰して、その価格が法外な水準に跳ね上がり得る。レシート保有者は強気になり、平時の二〇三%どころか、預託に対して与えられたバンク・マネーの半分を求めることすらあり得る。敵方が銀行の仕組みを把握し、宝蔵の持ち出しを妨げる目的でレシートを買い占める懸念すらある。このような緊急時には、銀行は「レシート提示者にのみ支払う」という通常の原則を破り、レシートを入手できないバンク・マネー保有者に対しては、帳簿記載どおりの全額を現金または地金で支払い、他方、バンク・マネーを持たないレシート保有者には、当該預託価値の二〇三%を支払うとされる。非常時に妥当とみなされるレシートの価値は、その程度にとどまるからである。

平時でも、レシート保有者の利害はアージオを引き下げる方向に働く。アージオが下がれば、彼らはバンク・マネー（すなわち、それで引き出せる地金）をより安く買えるか、逆にバンク・マネー保有者にレシートをより高く売れるからである。レシートの相場は概して、バンク・マネーの市場価格と、そのレシートで引き出せる貨幣・地金の価格との差に等しい。他方、バンク・マネー保有者の利害はアージオを引き上げる方向に

17 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

働く。自分のバンク・マネーを高く売れるか、レシートを安く買えるからである。こうした思惑による相場攪乱を抑えるため、銀行は近年、「市中通貨に対し、バンク・マネーは常時アージオ五%で売り、四%で買い戻す」と定めた。これにより、アージオは五%を上回らず、四%を下回らずに収まり、銀行貨と市中通貨の相場は、つねに両者の内在価値の比率にほぼ沿って保たれるようになった。導入前は、アージオが九%まで騰がることもあれば、平価まで沈むこともあったが、これは対立する思惑が市場に影響した結果である。

アムステルダム銀行は「預かり金は一切貸し出さず、帳簿上一ギルダーごとに、同額の金銀を庫内に保有する」と標榜する。有効なレシートに対応する分が、いつでも請求に応じねばならず、実際にも出入りを繰り返している以上、全額が現物で裏づけられていることは疑いない。他方、すでに失効し、平時には請求されることのない資本の部分、すなわち昔に失効したレシートに対応する分にまで、常時、完全な裏づけが施されているかは、理屈のうえでは必ずしも自明ではない。とはいえ当地では、「流通するバンク・マネー一ギルダーにつき、金庫に必ず対応する金銀一ギルダーがある」との確信が最も固い。市がこれを保証し、銀行は毎年交替する四人の執政のもとに置かれ、各任期

の初めに新任の執政が金庫を検分して帳簿と照合のうえ宣誓し、同じ厳肅さで次の執政へ引き継ぐ。この沈着で敬虔な国では、いまだ誓いが軽んじられていない。かかる輪番制だけでも、表向きにできない所業への抑止として十分だろう。アムステルダム政界の党派抗争がいかに激しく移り変わる折にも、勝った側が前任者を、銀行の運営における背信で訴えたことは一度もない。そんな訴えは、失脚した側の名誉と生計を最も深く傷つけるはずで、もし立証できたなら必ずや持ち出されたに違いない。一六七二年、仏王がユトレヒトにあった折にも、アムステルダム銀行は滞りなく支払い、創設後まもなくの市庁舎火災で煤けた貨幣までもが払出された。これらの貨幣は、そのとき以来ずっと金庫に眠っていたのである。

銀行の宝蔵の総額がいかにほかは、昔から好事家の憶測の的だが、確たる根拠はなく推量するほかない。口座保有者はおよそ二千人とされ、各人の平均残高を千五百ポンド（かなり手厚い見積もり）と仮に置けば、バンク・マナー、すなわち金庫の保有財貨は総額約三百万ポンド、換算して一ポンド十一ギルダーとして約三千三百万ギルダーとなる。巨額ではあり、きわめて広範な決済を回すには十分だが、一部の人びとが描く法外な規模からは大きく隔たっている。

19 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（一）

アムステルダム市は、この銀行からかなりの収入を得ている。倉敷料（保管料）に加え、初めて口座を開く際は十ギルダー、追加口座は三ギルダー十三スタイファー、振替一件ごとに二スタイファー、さらに小口の乱発を抑えるため三百ギルダー未満の振替には六スタイファーを徴収する。年二回の残高照合を怠れば二十五ギルダーの料料を取り、残高超過の振替指図には超過額の三%を課し、その指図自体も無効とする。加えて、レシート失効により銀行に帰属した外貨・地金を有利な時期まで保有して売る差益や、銀行貨をアージオ五%で売り、四%で買い戻す取引差益も収入源となる。これらの収益は役員俸給や運営費を大きく上回り、レシート付き保管の保管料だけでも、年に十五万（二十万ギルダー）の純収入に達すると見積もられている。